論　文

満洲語『水滸傳』の研究

寺村　政男（大東文化大学名誉教授）

A Study on "Shui Hu Zhuan" Translated into Manchurian

Masao TERAMURA

序文

満洲語『水滸傳』は、おそらくまだ世界のどの言語にも訳されていないものであり、その存在すら知らない人も多いかもしれない。近年は満洲語のみならず、清代に Mongol 語に翻訳された『水滸傳』の研究も始まっている（清代蒙訳本『水滸傳』研究・金榮・遼寧民族出版社・2019 年）『水滸傳』の研究領域そのものが少し広がってきていると言えよう。

清代には、『三國演義』、『水滸傳』、『金瓶梅』、『西遊記』、『封神演義』と言う明代の有名な小説、及び清代のベストセラーとも言うべき小説類『八洞天』、『生綃剪』、『合錦回文傳』など、多くの文学作品が、当時の「国語」であった清文（満洲語）に繙訳されている。

我が友趙志忠氏の『清代満語文学史略』（遼寧民族出版社・2002 年）によれば、150 種程の漢文学が満洲語に繙訳されているようだ。（漢語より満洲語に訳す場合は「翻」ではなく「繙」の字が使われることが多い）

と言ってもそれらの繙訳行為が時の政権に推奨され、歓迎された物ばかりではない。

『高宗純皇帝聖訓』巻二百六十三巻、厚風俗には以下の様に述べている、

「乾隆十八年（1753 年）癸酉、七月壬午、上諭内閣、満洲習俗純朴、忠義稟乎天性、原不識所謂書籍、自我朝一統以来、始學漢文。皇祖聖祖仁皇帝欲俾不識漢文之人、通曉古事、于品行有益、曾將五經及四子、通鑑等書、翻訳刊行。近有不肖之徒、并不翻譯正傳、反將水滸、西廂記等小説翻譯、使人閲看、誘惡之道。甚至満洲單字還音抄寫古詩者俱有」（『李士禎・李煦父子年譜』（王利器編、近代中国史料総刊三編第四輯・文海出版）

性純朴で、忠義に富んだ我等満洲族の品行を更に高めるために、『四書』や『五経』、『資治通鑑』などを有益の書を満洲語に繙訳しているのに、とんでもないのが居て、盗人集団の『水滸傳』や不義密通の『西廂記』を繙訳している奴がいる、との「御叱り」の一文である。これが満洲語『水滸

傳』がチラッと姿を見せる唯一の歴史文献であろう。

ただ小説の中でも、『三國演義』は別格で、『清史稿』列伝二十六「沈文奎傳」に天聰六年（1630年）九月の条に「九月、文奎復疏言「臣自入國後、見上封事者多矣、而無勸上勤學問者。上喜閱三國志、此一隅之見、偏而不全。帝王治平之道、奥在四書、跡詳史籍」と載せる。沈文奎が皇太極（Hūng taiji）の居室の片隅に『三国志』が置いてあるのを見て、こういう物より四書や史籍を読みなさいとたしなめている。ここに言う『三國志』は言うまでもなく正史の『三國志』ではなく、小説の方であり、皇太極は大の『三国演義』好きであった。

ここで言う『三國演義』は漢人の沈文奎が気付いたわけであるから、満洲語の『三國演義』ではなく漢文の物であったと、考えて良いだろう。

ただ上記の文の後に「宜選筆帖式通文義者、秀才老成者、分任移譯講解、日進四書二章、通鑒一章。上聽政之暇、日知月積、身體力行、操約而施博、行易而效捷。」漢文書籍の有用なものを満洲語に繙訳させ始めている。その中に当然『三国演義』が含まれていたのだろう。

満洲語『三国演義』は満洲族の入関後、政権がやや安定した順治七年（1650 年）に刊行されている。私も中国遼寧省々立図書館で閲覧したが、半葉框郭縦 29.9㎝横 20.8㎝の堂々とした内府刻本である。今各地に残る満洲語『三国演義』は満洲旗人達に下賜されたものであろう。もっとも満洲族は『三國演義』を今日の我々のように小説とは考えてはいない。彼らは『三國演義』を『兵書』と考えていたようだ。満洲旗人は戦に置いては勇猛ではあったが、兵略面では劣ると考えたのか漢人の兵略戦略を学べと、やや滑稽でもあるがせっせと『三國演義』を読んだのであろう。

ここには出てこないが『金瓶梅』も繙訳されている。皇帝の意に反して大いに読まれたようで、満洲語『水滸傳』に比べると比較にならないほど多くの版本、写本が残されている。訳し方も、満洲語『水滸傳』が物語の「筋」（plot）を追っているのに比べて、満洲語『金瓶梅』は個々の描写が漢文本に忠実である。当然のことながら、読者が期待し、訳者の好む所にしたがったのであろう。

また満洲語『西遊記』は、残存が少ない満洲語『水滸傳』よりも写本は更に少なく、私自身も「新疆人民出版社・1989 年・3 分冊」のシベ語写本と称するもの以外は現物を見ていない。しかし『故宮博物院藏品大系 8』（満文古籍・2014 年・故宮出版社）には上記の満洲語『三國演義』と共に満洲語『西遊記一百則』、満洲語『後西遊記』（40 回）等の恐らく内府精寫本であろう、実に立派な書物が載せられている。

それでは一体どのような小説が繙訳されたのか、前記『清代満語文学史略』によれば明清期の著名な作品はほぼ網羅されている。『肉蒲団』や『濃情快史』など「通曉古事、于品行有益」には反する作品も多々見られる。満洲族の漢民族文化への憧憬は根強いもので、漢民族文化の吸収と同化は、自らの言語満洲語の忘却と言う結果を招来している。

満洲族が何時の頃から自分の言語を忘れて行ったのかは明確には不明であるが、例えば文学面から象徴的な事象を挙げれば、八旗子弟の語り物「子弟書」の作品を時代ごとに並べてみると、孟姜女の物語『尋夫曲』は恐らくは康熙雍正年間に『西廂記』や『水滸傳』と同じ時期に、満洲語に繙訳されたものであろうが、これは全文満洲語のみである。やや時代が下って刊行された子弟書『螃

蟹段兒』では漢文の中に単語が満洲文字で綴られている。さらに時代が下ると同じく子弟書の『査関子弟書』では、満洲文字も忘れてしまったのか、満洲語の単語が漢字音を使って挿入されている。

「子弟書」から見ても、満州族は「文」としての満洲語は康熙、雍正の頃は何とか満洲語は自在に読み書きができたのであろうが、乾隆期から怪しくなり、記憶に残る「単語」レベルの満洲文字は何とか読め、ついで満洲文字はすべて忘れ去るも、「音」として記憶に残り漢字で満洲音を綴れば何とかわかると言う正に自己の言語である満洲語の、忘却の過程を象徴的に表しているようだ。

若い頃、恩師松枝茂夫先生からお聞きしたが、戦前まで北京に留学した日本人は、語学の教師として満洲旗人を北京語の教師として選び、食事は「清真」の食堂より出前を取るのが習わしだったと聞いている。満洲人は自身の言語は忘れはて、清末には老舎の『正紅旗下』に見られるような、体たらくとなりながらも、一方では皮肉な事に、見事な北京語の話者となっていたのである。

満州族が満洲語を忘却したあとは、公文書の満洲語繙訳などはモンゴル族がその役目を担ったと言われる。

ただあまり知られていない事ではあるが、漢文書籍を繙訳した満洲語文献は、漢民族文化が西方に伝わる一助となった事は事実で、ヨーロッパから明、清期に派遣された宣教師たちは漢字文献よりも彼らにとって、満洲語と言う文字言語が alphabetical に出来上がっているので、一つの漢字の意味が千変万化する漢字文献よりもはるかに理解しやすい物であったようだ。彼等は満洲語に繙訳された漢文文献を読み、それをヨーロッパに伝えたのである。

乾隆帝に仕えた Jean Joseph Marie Amiot は『満洲語辞典』を作り、Louis Mathieu Langlès によりパリで刊行されている。その後ヨーロッパ特にフランスでは 1814 年に Collège de France に漢語と満洲語の講座が開かれている。Jean Pierre Abel Rémusat やドイツ人でありながらロシアやフランスで活躍した Julius Heinrich Klaproth も漢語、満洲語に通じていた。人格的には聊か問題のある人物の様だが、現在 Bibliothèque Nationale de France に所蔵する満洲語資料は Paul Eugène Pelliot と彼の蒐集によるものが多い。

本論考は筆者が、底本に Bibliothèque Nationale de France に所蔵の満洲語『水滸傳』を使い、第 20 回までは校勘資料として中国中央民族図書館の蔵本を使用し、20 回ごとに纏めて、「水門（みなと）の会」特別刊行叢書として、2019 年 9 月に第一冊目の満洲語『水滸傳』Ⅰ―研究と翻刻・繙訳―を刊行し、2022 年 6 月のⅤまで、五分冊にして刊行し完訳した。

本論考はそれらを基礎的資料とて、幾つかの問題を取り上げた論考である。同書Ⅴ冊目第 100 回には、Bibliothèque Nationale de France 所蔵と大阪大学所蔵本の 2 訳を載せている。Bibliothèque Nationale de France 所蔵の末尾 3 葉程損壊が激しく解読できないため、岩手大学の鋤田智彦君に依頼し、大阪大学本の第 100 回を訳して貰った為である。一読すれば、Bibliothèque Nationale de France 所蔵と大阪大学所蔵本の満洲語訳は同じではない事が解る。別訳であろう。

満洲語『西廂記』も満洲語訳は 1 種だけではない。こちらは「水門―言葉と歴史」22 号から 29 号まで連載しているのを参照して欲しい。文学作品のみならず、四書五経類も康熙・雍正年間に繙訳されたものが乾隆年間に再度繙訳されているものが多い。

（一）残存する満洲語『水滸伝』抄本について

満洲語『水滸伝』は満洲語『金瓶梅』程多くの抄本を残してはいないし、満洲語『金瓶梅』の様に刻本（康熙 47 年・1708 年）は存在しないし、少数残存する物は全て「抄本」である。纏めてみると以下のようになる。

残存する満洲語『水滸伝』抄本

◎『全国満文図書資料聯合目録』によれば、以下の抄本を載せている。

1.『中央民族大学』　存 4 冊

2.A『故宮博物院』抄本　存 32 冊

2.B　存 3 冊

◎『増訂満洲語圖書目録』（渡邉薫太郎・大阪東洋學會刊行 S7 年・1932 年）によれば、

3.『大阪大学』　存 32 冊・雍正 12 年（1734 年）の序文あり。

◎『CATALOGUE DU FONDS MANDCHOU』（1979 年・PARIS）によれば、

4. Bibliothèque Nationale de France 所蔵本　抄本　100 回・20 巻・各巻 5 回

端本を除くと完本は 3 部（故宮図書館、大阪大学外国学図書館、Bibliothèque Nationale de France）が確認できる。2.A 及び 3 は書誌も、恐らく満洲語の訳文も同じものであろう。4 は書誌および訳文が相違する（満洲語『水滸傳―』Ⅴ―研究と翻刻・繙訳―第 100 回には、Bibliothèque Nationale de France 所蔵本と大阪大学本を載せているので、比較してみて欲しい）また大阪大学本は、今は欠けていて、見られないようであるが渡邉薫太郎氏によれば雍正 12 年（1734 年）の序文がある事、また文の末尾に漢字で「乾隆戊申五十三年（1788 年）臘月初八日終」と記載されている。こちらは恐らく、書写し終わった年月日か。1788 年 12 月（陰暦）8 日に写し終わったのであろう。（但し訳し終わった年の可能性も無い訳ではない）

Bibliothèque Nationale de France 所蔵本は Gallica のサイトで容易に閲覧できるが、表題は『蒙古律例』（monggo fafun–i bithe）となっているので注意を要する。このサイトは非常に有益ではあるが、表題と中身が相違するものが間々見られる。或いは満洲語が読めない方が扱っているのかもしれない。

これまで満洲語『水滸傳』について触れた論考はほとんど見られないが、わずかに大阪外國語学校で満洲語を講じていた、渡邉薫太郎氏が大正 14 年（1925 年）に出された『亜細亜研究』（大阪東洋學會）第 3 號に大阪外國語学校所蔵（恐らく殆どが渡部氏によって蒐集された物であろう）の簡単な書誌的記述がみられる。これは昭和 7 年（1932 年）に増訂版が出されており、『満文水滸傳』はいずれも稗史小説部に載せられ、二書共この部分の記述は同じである。記述は以下に抄出しておく、

本篇ハ支那小説ノ四大奇書ノ一ナル水滸傳ノ満洲語ノ全譯デ、雍正十二年（西紀一七三四年）ノ序文ガアル。此ノ序文ニヨリ満人ニ忠義ノ精神ヲ鼓吹スル為メ本篇ヲ出版セシコトガ知レル。其ノ内容ハ原本ノ如ク百回ニ分カツテアルモ、異本水滸傳ノ引首文ハ原譯何レニモナイ。唯忠實ニ原本

ヲ譯シタリト雖ドモ乾隆帝ハ本篇ヲ以テ不道德ノ書トシテ乾隆十五年（西紀一七五三年）之ヲ禁止シタリ。

この一文より、先ず雍正十二年の序文がある事、繙訳された時期は、当然それよりさかのぼる事になる。おおよそ康熙中期末期頃から雍正の初め頃と言う推測が成り立つ。恐らく『金瓶梅』や『西廂記』とほぼ同じ時期に繙訳されたのではなかろうか。この書は多分、現在は大阪大学箕面キャンパスの図書館に所蔵されているのであろう。（但し、現在は鋤田智彦氏によれば、コピーは第3回からしか入手できないとの事、従って序文は確認できないとの事である、第1冊が欠けているのか全文コピーを嫌う図書館側の意図なのか不明）

私が底本にした、Bibliothèque Nationale de France 所蔵本には序文は付いていない。また抄本であり刊本ではない。この抄本は100回分を1巻5回分入れており、合わせて20巻と言う事になるが、上記大阪大学所蔵は32本と書かれている。この冊数は故宮博物院図書館本と同じである。又乾隆帝云々は先に挙げて置いた『高宗純皇帝聖訓』巻二百六十三巻、厚風俗の条を指すのであろう。

また少し気になる所であるが、満洲語『水滸傳』は渡邊氏が言う「唯忠實ニ原本ヲ譯シタリ」とは言えない、漢文『水滸傳』の digest である。失礼を顧みずに言えば、渡邊氏が実際に満洲語『水滸傳』を読まれたのかどうか、疑問が残る。

繙訳形式から言えば、『西廂記』が満漢合璧本である事と満洲語『水滸傳』が満文のみで、満文『金瓶梅』には一部官職や地名、人名に漢語が添えられているのに比べても、満洲語『水滸傳』は一切漢語が添えられてはいない。

（二）満洲語訳の漢文底本は何か

『水滸傳』は漢文本を研究対象に扱っても、その版本の多さに辟易する。例えば『金瓶梅』と比べてみても、『金瓶梅』は万暦年間に書かれた1.『詞話本』、明末の2.『崇禎本』、清代の康熙年間の3。『竹坡本』と3種類で、1と2は版本間の比較も進み、拙論『金瓶梅詞話』における作者介入文等それに言い及んだ論考もあるが、2と3の比較はまだほとんどない。ちなみに満洲語『金瓶梅』は『詞話本』ではなく、2ないしは3からの繙訳である。また戯曲の満洲語『西廂記』も明刊本ではなく、戯曲から読み物風に変化した、清刊本である。

私が底本にした、Bibliothèque Nationale de France 所蔵本には序文は付いていない。また抄本である。この抄本は100回を分けて、1巻に5回分入れており、20巻となっているが、上記大阪大学所蔵は32本と書かれている。両訳は満洲語訳も少し相違するようだ。更にこの冊数は故宮博物院図書館本と同じで恐らく2本は満洲語訳も同じであろう。又乾隆帝云々は先に挙げて置いた『高宗純皇帝聖訓』巻二百六十三巻厚風俗の条を指すのであろう。

少し気になる所であるが、満洲語『水滸傳』は渡邊氏が言う「唯忠實ニ原本ヲ譯シタリ」とは言えない、漢文『水滸傳』の digest 抄訳本である。

繙訳形式から言えば、『西廂記』が満漢合璧本である事と満洲語『水滸傳』が満洲語のみで、満文『金瓶梅』[注1] には一部官職や地名、人名に漢語が添えられているのに比べても、満洲語『水滸傳』は一切漢語が添えられてはいない。抄訳本である限り、その底本探しは左程重要ではないかもしれないが、繙訳過程で気が付いた事を幾つか挙げて置く。

まず百回本『水滸伝』の『容與堂本』、内閣文庫（李卓吾先生批評忠義水滸傳）は、各回の題目の後に、詩曰、詞曰、箴曰（第 36 回）、念奴橋（第 41 回）、偈曰（第 45 回）を載せている。満洲語訳はこれらをみな省いている。のみならず、人物、風景、戦いの様を上記の物で表すのは、漢民族の作者の腕の見せ所である箇所であるが、満州族にとっては煩雑に思えたのであろうか、省略している。

満洲語『水滸傳』は百二十回本でも清代に流行した七十回本ではない。『水滸傳』では古形とされる百回本である。本稿の比較は百回本の『容與堂』（人民文学出版社･1975 年）と『無窮會』本（西南師範大学出版社・人民文学出版社・2013 年）を使用する。

以下Ⅰ、Ⅳ、Ⅴ等の数字は拙著、満洲語『水滸傳』―研究と翻刻・繙訳―の数字である。

ただ漢文百回本も『無窮會本』（李卓吾先生批評忠義水滸傳）は題目後の詩曰、詞曰は省略されており、通常「話説」（さて）で始めている。

また満洲語『水滸傳』は漢文『水滸傳』の digest 版であるので、上記の箇所を不要として除いてしまった事も考えられるので、より慎重な判断が必要であろう。

また以下は Bibliothèque Nationale de France 所蔵本を基礎にした検討であり、『故宮博物院』図書館本、大阪大学所蔵本ではないことを付け加えておく。2 本については今後の課題として残しておく。

以下順を追ってみて行く。

Ⅰ冊目（首回～第 20 回）

1. Ju u daci Ding yuwan–i bai niyalma juru loho be baitalambi.

朱武元々 定遠の　　閑人で　双刀を　　使う。

※「Ding yuwan」は『容與堂本』にはないが、『無窮會本』には「那人原是定遠人氏、能使**两**口雙刀」と載せる。

2. esukiyefi hendume,ainaha boobai loho,abide tutala jiha bahambi.mini gūsin jiha de udaha

罵り言うにはどうして宝刀なのだ、どうしてそんなに銭がいるのだ。俺が三十文で買った

emu loho inu yali faitafi deofu furuci ombihai,

一本の刀でも肉は切れるし豆腐も切れている、

※漢文原文は『容與堂本』には「三百文」、『無窮會本』は「三十文」となっている。

3. Cen da daci Pu ceng ni bai niyalma, G'ang ni gida jafahabi.

陳達は元々**鄴**城の遊び人、　　鋼の　鎗を持っている。

※陳達の出身地は『容與堂本』にはないが、『無窮會本』には「原是**鄴**城人氏、使一條出白點鋼鎗」と載せている。

Ⅳ冊目（第 61 回～第 80 回）

4. Sung giyang se hacihiyame bibuci ojorakū ofi dasame fuderei doro–i sarin dagilafi aisin
　宋江達は　　強いて留める事も出来ず、　再び送別の礼の宴会を　　催し　金
menggun boconggo suje–i jergi jaka be meihereme tucibuhe, aisin ton minggan yan cohome
銀、彩色の絹の　　類の物を　　肩に担ぎ出し、　　金の数は千両、　　専ら
Tai ioi de sarin facara doroi fuderengge
太尉に宴会を端折る礼として贈った
※この箇所『容與堂』にはないが、『無窮會本』には、「擡出金銀綵段之類、約數千金、專送太尉為折席之禮」と載せている。

5. Suwang biyan jiyang Hū yan šo Gin ciyang šeo Sioi ning inu.
　双鞭将の　　呼延灼　金鎗手の　　徐寧である
※『容與堂本』には「双鞭」となって居り jiyang に当たる「將」の字はない。『無窮會本』は「双鞭將」となって居り「將」が付いている。

6. genefi tuwaci emu ajige šenggiyan huwejen de Han–i galai araha ilan amba hūlha–i gebu
　行き見れば、　小さな白い屏風に　　帝の手で書いた、三大盗賊の　　名が
bi.
ある
※『容與堂本』は宋江、王慶、田虎、方臘の四大盗賊となっている。『無窮會本』は宋江、北遼國、方臘の三名。

7. Ho yan lo cuwan be fondolofi Han–i nure be hūlahaha, He siowan fung joo bithe be tatarafi
　活閻羅船を　　射ぬきて　皇帝の酒を盗み、　　黒旋風　　詔書を　　抜き取り
elcin be tooha
使節を　罵る。
※第 75 回、題目は『容與堂』は「謗徽宗」とするが、『無窮會本』は「罵欽差」とする。あるいは筆禍を恐れて変えたか。満洲語も「徽宗」を「使節」に変えている。題目に関しても、『容與堂』より『無窮會本』との整合性が高い。

Ⅴ冊目（第 81 ～第 100 回）

8. Dai dzung hendume,muse da an–i beye be alin–i niyalma obufi G'ao tai ioi booi duka juleri
　戴宗が　言うには、我等元の様に身を　　占い師の姿になって　高太尉の屋敷の門の前で
aliyaki.
待ち、
※この部分『容與堂』は「我和你依旧扮作公人」と載せ、『無窮會本』は「我和你依舊扮作山人」となって居り、満洲語訳の alin–i niyalma obufi は『無窮會本』系によっている。山人は「隠士」ないしは、「占い師」を指す。

9. Jang su yei hendume,tere hoki urse doroi jaka be labdu komso be buyerakū

張叔夜が言うには、その一党の者は礼物の多い少ないを欲する者ではありません
※張叔夜の部分は『容與堂』にはないが、「『無窮會本』」には「張叔夜道、這一般人、非在禮物輕重、要圖忠義報国、揚名後代～」と載せている。
10. Jang tai šeo baita bi seme anagan arafi Tai ioi ci fakcafi hecen de bedereme genehe
張太守は仕事がある事を口実にして、　太尉に　別れて城に　戻って行った
※この部分『無窮會本』は「張太守推説地方有事、別了太尉。自回城内去了」と載せるが、『容與堂本』にはこの部分はない。
11. Šumi sy–i Tung guwan wesimbume hendume,
枢密使の　童貫が　上奏して言うには、
※この部分『容與堂本』には、童貫の名は出て来ないが、『無窮會本』には、「有枢密使童貫奏道」と載せる。
12. tere fonde ere Gi jeo hecen be Liyoo gurun–i Han ini deo Ye ioi de jung be takūrafi
その時　この薊州城を、　遼国の　皇帝の彼の弟耶律得重を　派遣して
tuwakiyabuhebi .tede duin haha jui bi amba haha jui Dzung yūn jacin haha jui Dzung diyan
守らせていた。彼に四人の男の子がいて、長男を　宗雲、　次男を　宗電、
ilaci haha jui Dzung lei duici haha jui Dzung lin fejile isime afara jiyanggiyūn bi.jai emu Dzung
三男を　宗雷、　四男を　宗霖、　配下に　戦将がいる。　また一人総
ping amba jiyanggiyūn Boo mi šeng emu Fu jiyang Tiyan šan yung uhei hecen be
兵　大将軍　宝密聖、　一人は副将　天山勇が　一緒に城を
tuwakiyahabi
守っている。
※この箇所漢語の『容與堂本』には該当箇所はない。『無窮會本』には「原來這薊州却是遼國郎主差御弟耶律得重守把、部領四箇兒郎、長子宗雲、次子宗電、三子宗雷、四子宗霖。手下十数員戰将、一箇総兵大将喚做寶密聖、一箇副総兵喚做天山勇、守住着薊州」と載せている。
13. Yan ging ni tanggū hala ududu tanggū aniya dulimbai cooha–i arbun be sahakū.
燕京の　百姓は　数百年　中（国）軍の威容を見た事が無かった。
※この部分『無窮会』本は「燕京百姓有數百年不見中國軍容」となっている。『容與堂』本にはこの部分が無く、満洲語訳は、『無窮会』本に沿って訳している。
14. tere fonde Ju mian Ui bade ilgangga wehe baire ildun de gejuleme gaijara de tanggū
その頃 朱勔が 呉の地で　花石綱を求めるついでに搾取しかすめ　取りで　百
hala ambula gasame niyalma toome facuhūrara mujilen jahabi.
姓は大いに恨みを抱いていた。人は罵り反乱の気持ちを持っていた
※漢文本の「『容與堂本』」にはこの箇所に朱の名前は出ない。「『無窮會本』」には朱**勔**ではなく朱晋昭と載せている。
15. U sung da banjiha be gūnime emu jergi ambula songgoho.

武松も旧恩を　　思い出し　一度　大いに　泣いた。

※この部分『無窮會本』には、「武松念舊日恩義」と載せるが、『容與堂本』には無い。

16. mergen deo mukei jugūn be jiheo,olhūn jugūn jiheo.Yan cing jabume, giyamun–i

賢弟は　水路を　来たのか、陸路を　来たのか。燕青が答えて、　駅

morin–i jihe.

馬を使ってきました。

※『容與堂本』は「乗船到此」と載せ、『無窮會本』は「乗傳？到此」で、西南師範大学出版社本では「？」の部分に「船」を当てている。恐らく『容與堂本』に依ったのであろう。しかしここは「駅馬」であってもおかしくはない。

17. emu majige tondo mujilen be hutu enduri saci, dorgideri hašame wehiyere babi.Lung

一点の忠心が鬼神の如しと知れば、裏でこっそり庇護し助けるのも訳がある。龍

giyūn–i unenggi gebu hala be saki saci, Tumen mailasun bujan–i dorgi manaha bei be

君が真に姓名を　知りたければ、　万柏林の　中の壊れた　碑を

tuwa sehebi.

見よと言っている。

※この詩は『容與堂』本は「万松林裏烏龍主、夢顕陰霊助宋江。為報将軍莫惆悵、方家不日便投降」となって居り、「無窮会」本では「忠心一點鬼神如、暗裏維持信有之。欲識龍君真姓字、萬松林下讀殘碑」となっている。

18. Uju de etuhengge funghūwang ni dethei aisin–i saca beye de nerehengge

頭に　被るは　鳳凰の　翅の　金の　兜　身に　羽織るは

holboho muheren–i selei uksin oilo etuhengge muheriyen muduri–i junggin–i

連環の　鉄の　鎧　表に着るのは　円　龍の　錦の

sijihiyan dara de umiyelehengge arsalan–i（o：arsulan–i）jodoho umiyesun

外套　腰に　結ぶは　獅子を　織った　腰帯

bethe de etuhengge niowanggiyan hafiraha sohin–i gūlha ashahangge.foloho beri

足に　着けるは　緑を　含んだ　黒い　靴を　履いている。彫弓

selei sirdan baitalarangge niyaman be fondoloro giranggi be tuyere g'ang ni gida

鉄の矢　使う物は　心臓を　貫き　骨を　射貫く 鋼鉄の　鎗

yaluhangga dailara de urehe afara de taciha fulan morin.

乗るは　征伐に　慣れた 戦いに熟した　青毛の馬。

※「頭戴鳳翅金盔～」の詞は『無窮會本』には無く、『容與堂』に載せている。

19. Can jang jai yacin bošoi jy jui（o：ju）be inu sy de juktebume bibuhe

禅杖　また黒い色の　直綴も　寺に　奉納し　留めた。

※この部分『無窮会』本には「渾鐵禪杖～」と載せるが『容與堂』本には載せていない。

20. Li jiyūn daci nimerengge waka.damu Ging hecen de jifi hafasa ojoro cihakū ofi te

李俊は元々病を得たのではありません。京城に 来て役人と成りたくないので、今
Tung wei Tung meng ni emgi absi genehe be sarakū sehe manggi,Sung giyang nasame
童威、童猛と共に何処に行ってしまったか解りませんと言ったので、宋江は惜しみ
sejilefi,
嘆息して、
※漢文原文の「此時、有先前留下伏侍李俊小（校）從蘇州來報説、李俊原非患病、只是不願朝京爲官、今與童威童猛不知何處去了。宋江又復嗟嘆」は『無窮会』本には見えるが『容與堂』本には載せていない。
21. ilhi jiyanggiyūn dehi sunja. Sung wan Jiyoo ting Too dzung wang Han too Peng ki ～
副将軍　　四十五人　宋万　　焦挺　　陶宗旺　　韓滔　　彭玘～
※以下の人名の配列順は、『容與堂』本より『無窮会』本系に依っている。

以上、上記のような結果が見られる。18 の「頭戴鳳翅金盔～」の詞を除いて、『容與堂』本より『無窮會』本の方が一致する点が多い。従って Bibliothèque Nationale de France 所蔵本の満洲語『水滸傳』は『容與堂』本ではなく、『無窮會』本系の版本を底本にした可能性が高い。18 の「頭戴鳳翅金盔～」の詞については『無窮會』本系の漢文本の版本の相違なのかもしれないが、後考に俟つ。

（三）満洲語訳の「数字」の問題

数字と言うものは、翻訳する際、極めて簡単なもので、直接当該言語に置き換えれば良いのであるが、満洲語訳においては、理由は解らないが数字の処理はあまり正確とは言えない、例えば十二が逆転して二十、になって居る事もあり、漢文底本を探す際には、数字を根拠とすることは、避けた方が良い。

Ⅰ冊目
1. duin jergi doro arafi hendume,
四度　　礼をして言うには、
※漢文原文では「六拝」となっている、満洲語に訳す場合、数字に関して、無頓着な例が見られる。
2. sikse inenggi duin sunja kuwai šeo jifi,
昨日　　四、五人 捕り方が　　来て、
※漢語原文は人数を「三四人」と載せるが満洲語訳は「四五人」と訳している。
3. duleke biyai ice jahūn–i inenggi.
先月の　　初八の　　日
※漢文は 28 日となっている。
4. emu tanggū jang tantafi sabsifi goroki giyūn jeo de falabuci, acambi sehe manggi,
一百杖 叩き、　入れ墨して遠方の郡州に　流せばよろしいと言った　ので、
※満洲語は emu tanggū（百）となっているが、漢文は「杖二十」となっている。

5. nadan gin–i sele hadaha selgin etubufi,
　七斤の鉄の留め金のついた首枷をつけさせ、
※漢文は七斤半となっているように、満洲語は数字に関してはアバウトである。
6. Ts'ang jeo de isinara juhūn ilan minggan bibi,
　滄州に着くまでの道のりは 三千里　　ある、
※「三千里」は漢文では「二千里」となっている。
7. uthai orin yan menggun tucibufi ilan Yuwan de bume hendume
　すぐ　二十両の銀を　　取り出し三人の阮に　　渡して言うには、
※漢文原文は「三十」となっている。
8. susai gin–i bucebure amba selhen be tucibufi etubuhe.
　五十斤の　死刑囚の 大きな首枷を　　着けさせた。
※漢文原文は「二十斤」となっている。
9. Liyang šan po de juwan emu sain haha cooha emu minggan bi
　梁山泊に　　十一人の　　好漢と　　兵　　一千人が　　居る
※漢文原文は「共有七八百」と載せる。
Ⅱ冊目
10. hehe hendume,fusihun–i beye untuhuri orin sunja se be teleke,
　女が言うには、私めは　　虚しく二十五歳になっております。
※漢文原文は「奴家虚度二十三歳」となっている。
11. juwe giya ma be juwe bethe de hūwaitafi enduri yabun–i fa deribuhe de emu inenggi
　二つの甲馬を　　両足に　　貼って　　神行の　　法を使って　　一日に
duin tanggū babe yabume mutembi.
四百里を　　行く事が 出来る。
※漢語では五百里となっている。
Ⅳ冊目
12. sunja biya ci jifi tehei bolori jakūn biya oho.
　五月から　　来て居て 秋の 八月に なった。
※漢文原文は四月となっている。

（四）割注説明文

Ⅳ冊目（第 61 回～第 80 回）だけに見られるものであるが、割注の形式で語彙の説明をしている箇所が見られる。本抄本の繙訳者が複数であるのかもしれない。
Ⅳ
1. Lang dzi Yan cing（Lang dzi serengge ildamu sere gisun）Lu jiyūn i fonjime,Siyoo i

浪子燕青で、（浪子と言うのは敏捷な怜悧な者）盧俊義が訊ねるに、小乙如何してそんな
ainu uttu oho.
有様になった。
※この（　）内の 4 文字の満洲語は、小文字で「浪子とは敏捷な怜悧な者」と割注説明の様な形式で書かれている。「浪子」には「放蕩無頼」の徒の意味もあり、区別するために書かれたか。
2. Wang ni efu oho bihe,gemu ceo giyūn ma seme hūlambi.（bocihe efu sere gisun）
郡王の娘婿であったので、みな　醜郡馬と　　呼んでいる。（醜い娘婿と言う言葉）
※ ceo giyūn ma（醜郡馬）の説明を割注の形で 2 行に分けて、挿入している。
3. bi Šan ding gui Wei ding guwe be takarambi.Šan ding gui tere aha muke be baitalara
私は単廷珪　魏定国を　　知っております。単廷珪　こやつは　水を　使うのが
mangga turgunde niyalma tere be Šeng šui jiyanggiyūn sembi.（Šeng šui serengge
上手いので、　　人は　　彼を　聖水将軍と　呼んでいます。（聖水と言うのは
enduringge mukei jiyanggiyūn）Wei ding guwe tuwa be baitalara mangga turgunde
神の　　水の　将軍）　　魏定国は　　火を　　使うのが上手い ので
niyalma gemu tere be Šen ho jiyanggiyūn sembi.（Šen ho serengge enduri tuwai
人はみな　　彼を　　神火　将軍と　言っている。（神火と言うのは神の火の
jiyanggiyūn sere gisun）
将軍と　　言う言葉）
※漢語を音訳した言葉の説明を満洲語で入れている。
4. geren Yan cing be tuwaci,gašan–i hahai arbun–i miyamiyafi beye de sabsiha alha be gahari
一同　燕青を　　見れば、村男の　　姿に変装して　身の　　入れ墨を　　襦袢で
hūsifi sabuburakū obufi Šan dung ni ho lang–i adali miyamiyahabi.（ho lang serengge
覆い見えなくして　　山東の　　小間物売り　の様に変装している。（貨郎と言うのは
buyajime uncambi sere gisun）
小間物を売ると言う言葉 ）
※漢語「貨郎・huo4・lang2」（小間物売り）の音訳の説明を入れている。Ⅳ巻以外、他の箇所には漢語からの音訳、借詞に対しては、割注による説明はない。或いは繙訳者が一人ではなく複数なのかもしれない。

（五）満洲語辞書の問題

清代刊行の満洲語辞典や現代中国で刊行されている「満漢辞典」類は主として档案類解釈ないしは経典類の解釈を目的としたものが多く、戯曲、小説類からの引用例は少なく、適切な訳語に結びつかない例もある。
1. gašan

『清文彙書』は、「郷村」、『御製清文鑑』にはもう少し詳しく、yaya hoton hecen − i tulergi falga falga tehengge be gašan sembi（凡そ城市の外の宗族達が住んでいる所を gašan と言う）と載せている。典型的な例が『水滸伝』第四十八回に見える、祝家荘、扈家荘、李家荘であろう。広大な荘園の中に一族が大きな屋敷を構えている。従って gašan は時に屋敷と訳さなくてはいけない場面もある。また gašan–i niyalma は村人でもあり、荘園の使用人でもある。もちろん匪賊盗賊から防衛するための、武装も兼ねているので、兵士ともなる。現代の満洲語辞典が「村、村落」とするのは、不十分であろう。

2. ebumbi

第五十九回に ebufi（基本形 ebunbi）は諸字書には、「降りる」「下ろす」の意味が載せられているが、例えば Sung giyang se cuwan de ebufi tehe（宋江達を船に乗せておき）或いは両方の意味があるのか。後段にも lakiyara girdan hiyan be bargiyabufi cuwan de ebufi（吊り飾り、香を収めると、船に載せて）と「載せる」を ebufi と書いている。下ろす、降りる。載せる、乗せると相反する意味に使われている。「下榻」（客人を住まわせる）の意味も載せているので、或いは船に留める意味を持つのかもしれない。いずれにしろ、説明が足りない。

（六）満洲語の音の問題

用例の末尾の（Ⅰ）、（Ⅱ）などは、拙著、満洲語『水滸傳』Ⅰ—研究と翻刻・繙訳—からⅤのまでの数字である。ただ jugūn → juhūn や uthai → utkai、ineku → inegu、agūra → ahūra はなど g、h、k の変化について多数の用例があり、本稿では取り上げない。

1）音が省略されている物

o 音の欠落

tere nadan hūdai niyalma hendume,mende fiyose bi,（Ⅰ）

その七人の商人達が言うには、俺達には瓢の柄杓がある

※通常 fiyoose と綴られる。元々は漢語の「瓢子（piao2・zi）」の外来詞だろう。瓢箪を二つに割り水等を汲む器具。漢文原文は「椰瓢」と載せる。椰子殻で作った瓢箪状の工芸品を指す。椰子は南方の産物であり、恐らく北方民族の満洲族にはなじみの薄い物であったのか、不明。満洲語の fiyoose は朝鮮語の「바가지」（パガジ）に似た物であろう。biao の音が fiyao → fiyoo → fiyo と変化したか。

ya 音の欠落

<u>umihai</u> adali Sung giyang tuwafi ha ha hi hi seme ambula injembi.（Ⅱ）

虫の　様で　宋江は　見て　げらげらと　大笑いをした。

※ umiha は umiyaha（虫）であろう。ya の音の欠落は、或いは口頭語レベルでは既に落ちていたかもしれない。

ye の欠落

sain morin kemuni belin haha be yalubufi yabumbi, faksi hehe kemuni albatu
名馬は　常に　阿呆な男を　載せて　走り、　賢女は　常に　粗野な
haha de holbofi banjimbi sehebi seme gisureme wajifi,（Ⅱ）
男と夫婦になって暮らすと言っていると言い終わって、
※ belin は beliyen（阿呆）であろう。口頭語レベルでは、既に ye が欠落して belin となっていたか。
Po dzi liyelifi gala be sindaha manggi. Sung giyang ukcafi burulame genehe.（Ⅱ）
婆さん昏倒して手を　離したので、　宋江は　逃れて逃げて 行った。
※ liyelifi は正字法に従えば liyeliyefi（失神して、昏倒して）であろう。
ningniyeri mujilen aššame dekdefi emdubei edun aha mudan be gisurembi.（Ⅱ）
春心　動きて湧き上がり 只管　風雨が　音を　奏でるよう。
※ ningniyeri は正字法では niyengniyeri（春）と綴られる。当時の満洲語口頭語では前の ye が落ちて発音されていたのだろう。
emu dalbade mentu telimbi, dorgi de ilan amba nure anggara bi.（Ⅱ）
もう一方に　饅頭を蒸している。中に三つの大きな酒甕がある。
※ telimbi は teliyembi（蒸す）であろう。当時の満洲語口頭レベルでは ye の音は欠落していたのかもしれない。
i 音の欠落
giran be tucibufi hoton–i tule gamafi dejimbi sembi sefi,（Ⅱ）
遺骸を　出棺させて城外に　持ち行き火葬すると言っていました。
※ dejimbi は deijimbi（焼く）であろう。下段にも dejime となっており、当時の口頭語レベルの満洲語では既に i の音は落ちていたのかもしれない。
we 音の欠落
sini etuku mu ioi be minde jun gaji.（Ⅲ）
お前の着物と木魚を俺に貸してくれ、
※ jun は juwen（貸す、借りる）であろう。恐らく当時の口頭語レベルでは we の部分が欠落して発音されていたのではないだろうか。
e 音の欠落
tereci Liyang jung šu Bing ma du giyan hafan Da doo Wen da Tiyan wang Li ceng be
さて　梁中書は　兵馬都監の　大刀の 聞達　天王の　李成を
yamun de dosinbufi tere weile be hebšere de（Ⅳ）
役所に　入らせてその事を　相談した時、
※ hebšere は hebešere（hebešembi・相談する）と綴られる。
Kao を ko
te geli minde susai yan aisin bufi terei ergen be dayabu serengge wako（Ⅳ）
今また俺に　五十両の　金をくれ　その命を殺めろと言うのと違うか、

※ kao が縮音して ko となった。

2）音が増えている物。

ki 音の増加

ere gese fikiyame halhūn de adarame yabici ombi.（Ⅰ）

この様に、うだる様な暑い時に如何して行く事が出来ましょう。

※ fikiyame は fiyakūme（うだるような）であろう。

o → oo

boofun daliyan be gamafi tubade sindahabi.（Ⅰ）

褡褳の包を持って行こうとすれば、そこに置いてあった。

※ boofun は bofun（包み）であろう。包（bao1）の音を boo（音便で bao か？）で表したのか。

šša → šaša

aššambi（動かす）→ ašašambi「a」音が加わっている

ere gese girure yerte be umai sarakū,aikabade majige edun daci oho ašašambi kai.

この様な恥ずかしい事は知らない、もし少しでも風流を燃え上がらせ動かすならば、

U sung be jorime hendume,ere teo to hūwašan absi beye–i ubu be tuwarakū,ainu gala

武松を指さして言うには、頭陀　　坊主め　何と　身分を　　弁えず、如何して手や

bethe ašašambi（Ⅱ）

足を出すのだ。

faššaki（faššambi・尽力する）→ fašašaki（fašašambi）

muse de dorgideri fašašaki（Ⅱ）

我等は 裏でこっそり尽力しよう。

ššo → šošo

hoššoho（hoššombi・騙される）→ hošošoho（hošošombi）「a」音が加わっている

Liyang šan po de gamafi argadame hošošoho, duin biya bibuhe.（Ⅳ）

梁山泊に　連れて行かれ、奸計を用いて騙され、四ヵ月居りました。

giohame（giohambi・物乞いをする）→ giyoohame（giyoohambi）「yo」が加わっている

damu hoton–i tulergi de giyoohame miyoo de dedumbi（Ⅳ）

仕方なく城の外で　　物乞いをし 廟で　寝ています。

3）音が変じている物。

u → io

niojan be dargiyafi Jeng tu hū be tuwame hendume（Ⅰ）

拳を　　振り挙げて鄭屠を　　睨み付け言うには、

tere niyalma be terei hehei bethe be nade gidame fehufi,juwe niojan（Ⅱ）

その女の足を　　地に押さえて踏みつけ、両の拳を　　振り挙げて、その男を

U sung terei hehei bethe be nade gidame fehufi,juwe niojan dargiyafi tere niyalma be

武松はその女の足を　　地に押さえて踏みつけ、両の拳を振り挙げて、その男を

tuwaci（Ⅱ）

見れば、

U sung hūsun bisire teile tasha be ulan –i dolo gidafi, niojan dargiyafi tere amba tasha be

武松は力を　振り絞り　虎を　　穴の中に押し込めて、拳を振り上げて　その　大虎を

tantahai angga oforo ci senggi tucime bucehe（Ⅱ）

打ち続けると、口や鼻から血が出て死んでしまった。

※ niojan は nujan（拳）であろう。『満文水滸伝』が書かれたのは、恐らく康熙年間であろう。この頃は口頭語と正書法の間の差異があるようだ。

š → rs

Ts'ai fu loo ci tucifi generede fu–i horso ci emu niyalma gala de budai tamsu jafafi

蔡福は牢から出て歩いている時 壁の隅から一人の男が　手に　飯の甕を　持ち

šenggin hiterefi jimbi（Ⅳ）

額を顰めて出て来た。

※ horso は hošo（隅、角）であろう。当時の口頭語レベルでは rs の音が š 音に変化していたのであろう。

o 音が ū 音に

hūltome Sung giyang be baihajiha arame jihe manggi（Ⅱ）

いつわりて　宋江を訪ねて来た振りをして来たので、

※ o と ū は音が近いので混用されているようだ。

u 音が ū 音に、ū 音が u 音に

Mu da cung Gu da sao seme hūlambi.nure diyan neihebi. mini tere eyūn de coohai

母大虫の　扈大嫂と　呼ばれて　酒屋を開いている。　私のその姉には　　武術の

erdemu bi,（Ⅲ）

腕前がある。

※ eyūn は通常 eyun（姉）と表記される。

deo si baturu mujangga damu Bejing hecen be guwa jeo hiyan de duibuleci ojorakū,（Ⅳ）

弟　君が勇士である事は確かだが、北京は　　他の　　州県と　比べられない、

※ guwa は gūwa（他の）であろう。

4）漢語の有気音、無気音の混同

Si ai turhunde Gin dzui liyan be murime gaiha sefi,（Ⅰ）

お前は如何言う訳で、金翠蓮を迫害して手に入れたと、

※ Gin dzui liyan（金翠蓮）「翠」の漢語音は cui4 であるので、満洲語の対音は dzui ではなく ts'ui であろう。

Hūwa Hūwašang Too hūwa dzun gašan de ambala facuhūraha.（Ⅰ）

花和尚　　桃花村を　　大いに　騒がす

※ Too hūwa dzun（桃花村）の「村」は cun1、満洲語対音は ts'un であろう。

K'ao tai ioi de alafi,mimbe waki sembio.（Ⅰ）

高太尉に話して、俺を殺そうと言うのか。

※高の漢語音は gao1 で満洲語対音は K'ao ではなく G'ao であろう。

Tai dzung inu U hiyo gio–i amasi julesi yabuha weile be emu jergi alaha bici donjici,（Ⅱ）

戴宗も　　呉学究の　　往来した　　事を　一通り話すのを聞いていると、

※戴（dai4）で満洲語対音は Dai が正しい。本書では Dai dzung と言う表記と混用されている。Ts'oo tai gung（曹太公）を Dzoo tai gung と表記している。（Ⅲ）

例示は少数に留めるが漢語の声母の有気、無気を満洲語対音が混同する例が非常に多い。

5）その他

1. niyangdzi –i baru alame,Kiyoo teo Lu kiyan–i emgi nure omire de gaitai anggai sokton.（Ⅰ）

　奥様に言うには、教頭は陸謙と一緒に酒を飲んでおられた時、突然口から息を吐き出すと、

※ sokton は sukdun（息、呼吸）であろう。（表記に無圏点文字の記憶が残っていたのか）

2. ooren be sabure jakade,feser seme mujilen sesulefi aša seme hūlaha.（Ⅱ）

　位牌　を見たので、　ドキリと心を　驚きて　嫂さんと叫んだ。

※次頁には oren と載せる正書法では ūren（位牌）の事。（表記が一定していない）

3. uju–i emu hacin šurdeme yabura hoošan doose tere seci boo ci tucihe niyalma aifini

　第一の類は　巡礼する　僧侶　道士で彼等と言えば出家した人、つとに

eleki emu hoošang be jocibuha.（Ⅱ）

危うく一人の和尚を殺す所でした。

※漢語「和尚（he2・shang4）」から来た外来詞であるが、満洲語は ng を n で表している。後段に hoošang の表記も見られ、一定していない。hūwašang、hošang の例が見られる。

4. we Sung giyang be gosirakū,tere anggala Yan po si de geli aliyafi daltulara, ejen akū（Ⅱ）

　誰もが宋江を　残念がり、彼等は　閻婆惜に　また　身元引受の　主人も居ない。

※ daltulara は damtulara（質入れ、身元保証）の間違いであろう。m とすべきを l としている。満洲文字の右横に付けるヒゲは上に上げれば l、下にさげれば m となる。

5. amargici Io julergi Lu de isinjiha de,（Ⅲ）

北から　幽　南に穆に　　至るまで、

※ Lu（祐）は Mu（祐）の書き間違い。下にはねる所を間違えて上にはねている。

6. Žuwan siyoo ci hendume,aikabade fafun be alici ahūn be ududu meyen sacimbi kai. Žuwan

阮小七が　　言うには、もし命令を待っていたら兄貴は幾つもに斬られてしまうぞ。阮

siyoo el Žuwan siyoo u gemu ini sere jakade,（Ⅳ）

小二　　阮小五も　みなそうだと言ったので、

※「阮（ruan3）」の満洲語対音は Iowan が使われることが多いが（Iowan siyoo ci donjifi hūlame hendume,・阮小七が聞いて叫び言うには）、ここでは Žuwan と表記されている。こちらの方が漢語音の ruan に近い。

7. Sung siyan fung cooha be gaifi Ping gu hiyan deri geneme,（Ⅴ）

宋先鋒は　　兵を　　率い　平峪県から　　行って、

※繙訳者は「峪・yu4」を旁の「谷・gu3」の音に引きずられ gu と読んだようである。

（七）漢語理解の問題

漢語の様に長く且つ高度な文化を持った言語で書かれたものを、文字を以てわずかな時間の満洲語に繙訳することは、順治・康熙年間に急速に漢民族化して行く満州族にとっても、いささか困難な作業であったと思われる。さらに言えば、『水滸傳』は「明代漢語」で書かれており、満州族が習得した「清代漢語」とはいささか違いがある。故にまた満州族が急速に漢語を習得して行った事を考えれば、或る意味前代の文学作品を、次代の読者が如何読みこなしたかと言う事にもつながる問題とも考えられる。

1. K'ai fung fu–i ejen Boo dai jy ini beye irgen be dasara. hū jy fang gebungge kūwaran de

封府の　　主の　包待制は　　自ら 民を　　治療するに　和濟方と言う有名な局で、

beye ulin be tucibufi okto acabufi,（Ⅰ）

自ら財を投げ出して、薬を調合し

※「惠民和濟局方」は医書『太平惠民和劑局方』の事であろう。満洲語訳は取り違えている。

2. tere haha ebuku sabuhū mukšan maktafi uthai doro arafi hendume,buya niyalma yasa bisire

その男は驚いて　　棍棒を捨ててすぐ　　礼を為して言うには、手前は　　眼があれ

gojime Tai šan alin be takahakū.（Ⅰ）

ども　泰山を見知らず

※漢語「有眼不識泰山」（見聞が狭い、お見それしました）の直訳。下線の満洲語で通じたかは不明。

3. sakda eniye siningge be gamaha mujangga,（Ⅱ）

私が　　あんたの物を取ったのはその通りで、

※ sakda eniye は漢語「老娘」の対訳であるが、この漢語は確かに「老母」の意味もあるが、ここでの漢語の意味は「妻の自称」であろう。訳語は、「私が」と訳しておく。翟灝の『通俗編』巻 22「婦

女」に「俗或謂妻曰老娘、殊不典」と載せる。従って満洲語訳は誤訳していると言える。

4. tere hehe soktofi gūnin aššafi uthai hendume,bi fucihi be tuwaki sembi sehe manggi,
　その女は　酔って気持ちが動きすぐ言うには、私は仏様を拝みたいわと言ったので、
hoošang tere hehe be yarume emu leosei ninggui dedure boo de gamaha.（Ⅲ）
和尚は　その女を　導いて　二階の　寝房に連れて　行った。

※ fucihi（仏様）であるが、男性器を暗示する。

5. si emu gereke be alanjire teo tu be baifi,amargi duka de mu ioi be forime ging hūlame
　貴方は一人明るくなったのを告げる頭陀を探し、後門で木魚を打たせ　時間を　告げ
ohode,（Ⅲ）
させて、

※頭陀は梵語の dhūta（物欲を払う修行をした高僧）から来ているが、漢語では、抖擻、杜多とも書く。後世は格が下がって、乞食坊主、行者を指す。元代の『西廂記』にも見られるが、『水滸傳』が成立したと考えられる明代は、特に寺院、道観、僧侶、道士の腐敗は激しく、寺院が密通の場所ともなっている。

6. acike nimeku ujelefi olhome gurihekū cananggi dobori beye akū oho. wajime nadan
　叔父は病が　重くなり移る事が出来なく、先日の夜亡くなりました。四十九日の供養が
wajiha manggi,guriki sembi.（Ⅲ）
終わったら、移りますと言った。

※漢文原文は「待断七」となって居り、四十九日が過ぎたら意味であるが、満州語も wajime nadan（断七）と成って居る。この仏教の風習は入関前から満州族にもあったものか、入関後漢民族との接触で持ち始めたものかは不明。ただツングースに広く伝播し文字を持つ満州族の満州語で記録された「尼山薩蛮」の諸抄本などを見てゆくと、新しい物ほど、素朴なシャーマンの世界に次第に仏教思想や儒教倫理が浸透して来る様子が解る。

7. Cibin–i deberen jiderakū,ilga geli sakdambi.（Ⅴ）
　燕子は　来たらず、花もまた老いたり。

※漢語の燕子は、「つばめ」の事、Cibin–i deberen（燕の雛）と訳すのは間違い。

8. ere uthai nimanggi be gaifi hūcin be jukire adali kai.（Ⅴ）
　これ即ち雪を　運んで井戸を埋める様である。

注 15. 漢語「正如擔雪填井」（報われない行為）を直訳したもの。

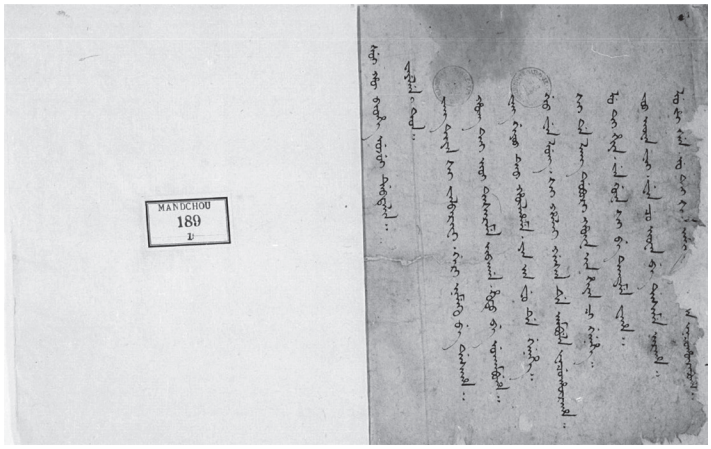
9. Sung giyang ci fakcafi Hangjeo–i baru geneme, Lin an hiyan dulefi Deng ceng ni baru
　宋江から　別れて　杭州に　向かって行き、臨安県を　通り　登程に　向かって
genehe.（Ⅴ）
行った。

※漢語原文は「進發登程去了」（進軍して行った）であるが、満洲語は「登程」を地名の様に理解しているが、誤り。「登程」は出発して行く事である。

10. emu aisin–i uksin etuhe abkai enduri gala de hutu be be dahabure boobai mukšan be jafafi
　一人金の　鎧を　着た　天神が　　手に　降魔の　　宝杵を　　持ち
untuhun–i baci tantame wasinjiha.（V）
虚空より（打ちながら）下りて来た。
※漢文本は「從半空裏打將下來」（半空より降りて来た）となっている。「打」は落ちる、降りるの意味で、tantame の基本形 tantambi（打つ、殴る）の意味ではない。「打將下來」と言う表現は『水滸傳』に多く見られるが、清代の漢語を習得した満州族には理解できなかったのかもしれない。

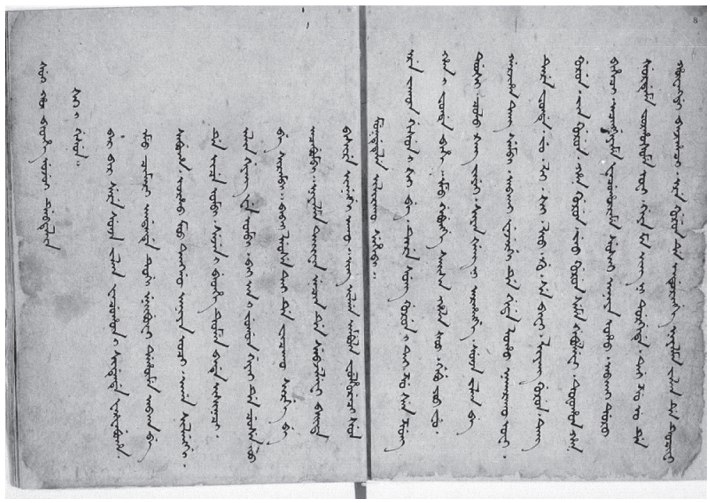
注 1. OLD MANCHU AND MONGOLIAN BOOKS AND MANUSCRIPTS に Margin title and title on each case is *Hebi Jin Ping Mei*《合璧金瓶梅》と言う合璧本があるようだが未見。

図版 1



Bibliothèque Nationale de France 所蔵本（第一葉）

図版 2



Bibliothèque Nationale de France 所蔵本（第 8 葉）